

前回では、縄文時代の狩猟のありさまについて、弓矢や槍などの道具を用いて、山野の恵みを最大限に利用しようとした縄文人の姿を語りました。こうした狩猟の道具は、縄文時代に続く弥生時代になると、戦いの道具として新たな展開を見せます。今回は、戦争という観点から、弥生時代の道具についてみていくことにします。

**農耕の開始**

弥生時代には、大陸から稲作技術が伝わり、本格的な農耕が開始されます。本格的な農耕の開始こそが縄文時代と弥生時代とを区別

する指標となりますが、これに加えて、本格的な戦争が始まったことも忘れてはならないでしょう。「戦争の考古学」に取り組まれた考古学者—故佐原真さんは、戦争の存在を示す考古的の手がかりとして、①守りの村②武器③殺傷された

痕跡を残す人骨④武器の形を模した儀礼の道具の存在—などをあげ、こうした手がかりが弥生時代に出そろうことから、そこに戦争の

はじめを見られました。近江の場合では、③についてはまだ確認されていませんが、その他の手がかりは守山市下之郷遺跡のなか

の湖南の中心集落の1つと推定されます。とくに注目されるのは、集落の周囲にめぐらされた6〜9条の溝

からは木製の盾も出土しています。つまり、②の条件を満たしているのです。これらが出入口周辺の防御に用いられた武器であり、実

に確認すること（8坪、深さ約2坪もあり、単なる排水用のものとは考えにくく、おそらく戦乱などによる外敵の侵入を防ぐ防御施設と思われる。つまりこの点で①守りの村といえるのです。加えて、集落西端には、環濠が途切れ



下之郷遺跡の復元環濠

た入り口部分が確認されています。その周辺からは銅剣をはじめ、石を打ち割ったり磨いたりしてつくった剣（石剣）▽石の矢じり▽焼けて折れた弓—などが出土しました。また、環濠

（約2200年前）のムラの遺跡です。遺跡の規模は東西670坪、南北460坪、面積が約25坪に及ぶ大規模なもの、この時代

際に戦いのあったことが想定されています。佐原さんは、弥生時代の石の矢じりが縄文時代に比べて大きくなることから「狩猟器具」から殺傷力のある「武器」へと変化したことを読み取られました。このような戦争のはじまりの背景には、農耕社会の開始に伴い、農耕に適した土地に人々が定住するようになり、土地やそれに関連した用水などの利権をめぐる集団間での争いが活発になってきたことがあると思われま

**狩猟から戦いの道具へ**

間での争いを通して、それぞれの間の格差や支配関係が生じ、クニの成立へ向けて、社会が大きく動き出すこととなります。（財団法人滋賀県文化財保護協会 辻川哲朗）